

蔵の魅力を活かした観光まちづくりを ～「まちづかい」の思想に学ぶ～

月刊地域づくり 2013 年 5 月号特集より

公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所長

多摩大学大学院客員教授

法政大学キャリアデザイン学部講師

丁野朗

< 東北大震災から見えた蔵や歴史遺産の価値 >

平時には何も感じない当たりまえの景観や建物。その建物たちは、古さゆえに都市再開発のなかで次々と破却されつつある。東日本大震災は、こうしたさまざまな歴史建造物、さらには祭りや伝統工芸などの多くを流出し破壊した。しかし、復興に向け日々の生活の安定を少しずつ取り戻しつつある現在、これら歴史の証人たちは、何物にも代えがたい自らの誇りやアイデンティティの拠り所として再評価されつつある。衣食は足りても、それだけでは空しい。家族の絆とともに、自らの地域に誇れるものとは何だったのか。大震災が改めてそのことに気づかせてくれた。

その象徴のひとつ宮城県気仙沼市は、沿岸部の港町が根こそぎ破壊された。市民が親しんだランドマーク、漁師たちが港に帰還する目安の建物なども流出した。しかし、内湾海沿いに、ひときわ目立つ建物が倒壊したまま残っていた。1912 年（大正元年）創業の老舗酒蔵「男山本店」の社屋兼店舗である。その建物に、今年 3 月、米国ニューヨークの非営利団体・ワールド・モニュメント財団から、復旧のためにと 25 万ドルの義捐金が拠出された。この財団は、大震災で壊滅的な打撃を受けた千葉県佐原地区の町屋再生のために 20 万ドルの支援をしたことでも知られている。

「慣れ親しんだ街並みの復興が地域の元気になり、地域社会の復興につながる」と考えた米国の NPO の発想は、古いものを次々と破却し、顔の見えない街並みをつくり続けてきたわが国のまちづくりに対する、ある種の警鐘とも受け取れる。

歴史（地域の記憶）を喪失したまちに未来はない。地域の未来図は、その地域の歴史の中に潜んでいる。東京大学名誉教授、故木村尚三郎先生の名言「振り返れば未来」に、今こそ私たちは立ち返る必要があるのではないか。

そこで、本稿では、蔵など地域の歴史建造物の活用とその手法について考えてみたい。個々の地域の事例については、本特集の地域事例をご参照頂くとして、ここでは特に観光交流資源としての蔵の価値や考え方について触れてみたい。

< 「観光まちづくり」からみた蔵の価値 >

【蔵の多様性と歴史的背景をみる】

一口に蔵といっても多様な用途・形態がある。土壁の外壁と漆喰で仕上げられた、いわゆる土蔵は、倉庫や保管庫として江戸時代以降、各地に数多く建てられた。その用途には保管庫機能のほか、店舗や住宅を兼ねて建てられるものもある。これらは、一般に「見世蔵」あるいは「店蔵」と呼ばれ、保管庫とは開口部の作り方や間取り・内装が異なっている。

蔵づくりの町並みで有名な川越（埼玉県）は、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に指定

され、蔵の集積エリアは観光交流の魅力的な空間となっている。また川越や倉敷と並び、日本の三大蔵のまちと言われる福島県喜多方市では、「蔵のひとつも持つ」というのが成人の証とされてきた。その積み重ねもあり現在4,000を超える蔵が確認されている。まさに日本一の蔵のまちである。酒蔵をはじめ、見世蔵、座敷蔵、土蔵など多様な用途の蔵が、今なお生活の一部に溶け込んでいる。

蔵には、土蔵だけでなく、近代以降、洋風建築を取り入れた石蔵や煉瓦蔵などが数多く建設された。「北のウォール街」と呼ばれた小樽は、1879年に国内3番目の鉄道の開通（手宮線）とともに、空知の石炭積出港、国際貿易港として栄えた。小樽運河を中心に小樽軟石と呼ばれる地元石材を使った銀行、商社などの建物や運河沿いに石蔵が集積した。1960年代の運河埋立論争後は、徹底した景観保全と都市デザインによるまちづくりを進め、国際的な観光交流都市としての地歩を築いた。



運河沿いに並ぶ石蔵（小樽市）

わが国の近代経済を支えた繊維と鉱山、その積出しのための港湾都市などを中心に、赤煉瓦建物や倉庫も数多く建設された。シルクなどの輸出で栄えた横浜には、保税倉庫としての赤煉瓦倉庫や官庁・商館、外国人居留地など多彩な赤煉瓦建築が見られる。横浜との結び付きの強かった富岡製糸場（群馬県）や生糸の町として栄えた前橋、桐生などにも煉瓦建築の工場や蔵が数多く建てられた。同じく港湾都市として栄えた舞鶴や函館、門司、日本初の機械式ホフマン輪窯の立地で「煉瓦のまち」と呼ばれた深谷などでも、赤煉瓦の美しい倉庫・建築物が今なお数多く残されている。

【蔵の活用と事業性の確保】

時代背景も用途もことなる蔵の活用には、多様な編集視点が不可欠である。蔵の活用事例の多くは、地域コミュニティー活動の拠点や情報拠点、まちづくりやボランティアガイドの拠点、あるいは地域の史料館等としての活用を図るケースが多い。

かつての常陸の国の国府、国分寺・国分尼寺跡が残る茨城県石岡市は、昭和初期の大火で駅周

辺の建物の多くが焼失してしまった。しかし、江戸時代からの商家蔵と昭和初期に建設された多くの看板建築が残されている。町の中心にある古い商家蔵は、藍染め体験などができる観光拠点施設「まち蔵藍」として活用されている。近隣の酒蔵などとも連携した、歩くまちづくりの拠点施設として活用されている。



明治の商家蔵をまちづくり拠点に（茨城県石岡市）

しかし蔵などの歴史施設の活用では、それ自体が自立できる事業化の工夫が不可欠である。道の駅のような地域産品・ブランド品の開発、これらを用いた特色のある「食」や観光プログラムの開発、有料ガイドの育成など、収益性の確保が大きな課題である。自治体や地域商工団体等による支援は必要だが、長い間、支援になれてしまうと、自立のための自助努力の芽を摘んでしまう虞もあることを肝に銘じるべきである。

蔵が集積し、「蔵のまち」などとして面活用できる場合は、それぞれの蔵の特色と事業性を高めながら、地域全体の景観・デザインに配慮した空間演出により、観光交流エリアとして活かすことができる。先の喜多方や会津、倉敷、川越、栃木といったまちは、すでにこうした活用に優れた手法を発揮している。問題は、蔵の所有者の事業が破綻し建物が売却されたり、まち並みの一角に高層マンション計画がもちあがるなど、まち並みを損ねる危機は常に生じる。会津若松では、こうした度重なる危機に、(株)まちづくり会津を組織化し、県・市の支援窓口とするとともに、建物外観を変えずに他用途への活用や投資を促すなど、地道な活動を続けている。街並みの整備はエンドレスの戦いでもある。

【蔵のネットワーク（連携）を活かす】

地域の蔵には、酒蔵のような共通の業種がネットワークした取り組みも盛んである。酒蔵などの食・飲料系の企業では、近年の酒蔵ツーリズム（産業観光のひとつ）が人気であり、土産品などの客単価も高いため投資回収が図り易い。例えば、諏訪地域にある5蔵（諏訪5蔵）のネットワークでは、酒蔵パスポート発行による「飲み歩きプラン」や、その発展系として諏訪5蔵寄席、温泉巡りなどの企画を通じて、多くの観光客を受け入れている。

こうした酒蔵の活用に、観光庁も「酒蔵ツーリズム推進協議会」を創設し、各地の取組み支援に乗り出した。具体的活動はこれからだが、地域ごとの酒蔵協議会などを対象に、これらの全国ネットワーク化とツーリズムの仕組みづくりの支援、訪日外客の送客などを模索している。すでに佐賀県の「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」や兵庫県「はりま酒文化ツーリズム協議会」、「パ酒ポート」で観光回遊をめざす北海道広域道産酒協議会などのほか、兵庫県灘や京都府伏見などの先進地の活動の連携を進めている。対象は日本酒だけでなく、ワインや焼酎なども含まれる。

【「生業（なりわい）」が観光になる】

居住用の蔵を除けば、その多くは「生業（なりわい）」と深く結びついている。小田原城の城下町として栄えた小田原市は提灯と蒲鉾がシンボルだが、干物、梅干し、鰹節、塩辛、和菓子、漬物、佃煮などの食材、木地挽き・ろくろ、寄木細工、漆、染め織、砂張（鋳物製品工房）など実に多彩な産業・生業が集積している。そして、これらの生業が、今も生き続けていることがこの地域の大きな強味でもある。

小田原の観光まちづくりは、この「なりわい」がさらに元気になること、そのなりわいをベースにした集客交流を目指すなかで、さらに新たな産業の創出と雇用拡大につなげるといった戦略である。具体的には、さまざまな店舗・工房を「街かど博物館」として、日々の商業活動拠点をそのまま観光交流の拠点とする。昭和初期の旧網問屋の建物を「なりわい交流館」として再整備し、観光案内や交流の中核拠点として活用している。「生業（なりわい）」はどの都市にも必ずある。郊外型の大形SCの立地などで苦境にたっているケースも多いが、なりわいの再生は地域活性化の重要な戦略である。



網問屋の建物を活用した「なりわい交流館」(小田原市)

【「歩きたくなる」まちづくり】

「なりわいツーリズム」とも深く関係するが、これからの観光まちづくりで重要なことは、都市の中心エリアが「歩く・歩ける」環境、雰囲気をもっているか否かである。マスツーリズムの時代の観光は、著名な寺社・仏閣や大自然、温泉地、大型テーマパークなどが対象となってきた。

従って、市民が住む都市の中心部から観光地は隔離されているケースが多かった。

仮にどんなに観光地が優れていても、その母都市がゴーストタウンで活気がなければ、観光客は興ざめしてしまう。地域の生活に触れたり、地元の人々との交流・ふれあいが観光の大きな目的の一つとなっている今日、地域の生業を訪ね、まち中をブラブラ散策して地域らしさを実感してもらうことが大きな満足に繋がる。

いわゆる観光地ではないが、埼玉県行田市は、かつて足袋産業が栄え、今でも約70棟のユニークな足袋蔵が残っている。これらの蔵の活用を目的に、2004年に「NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」が発足した。その前年、解体予定であった店蔵・忠次郎蔵を再生し蕎麦屋を開業して活動の拠点とした。行田の蔵は土蔵から石蔵、煉瓦蔵など時代ごとに実に多様な蔵が存在するが、活動の大きな特色は、蔵の所有者と連携して、音楽や絵画、ギャラリーなどさまざまな活動を行う市民団体が、いわばアドプト（養子縁組）のような形で蔵の活用と管理を行っている点である。蔵は放置すればますます荒れる。蔵は個人の所有ながら、地域の共通景観として地域の共通財でもある。これを市民的ネットワークで活用し保全しようという発想である。



足袋蔵を改装、まちづくり拠点となった蕎麦屋（埼玉県行田市）

点在する蔵と地域商店などのマップを作成し、各蔵を結ぶルートを考案して年に数回、ウォーキングイベントも実施している。2008年に長崎で開催された「さるく博」は、まち中を歩くことが観光の大きな動機になることを立証したが、行田でもマップ片手にまちを歩き(遊サルク)、ガイドとともにテーマの深堀りをする(通さるくや学さるく)といった次の展開を模索している。

【街道・海道を活用した広域の蔵ネットワーク】

酒蔵はもとより、地域の産業の発展は、原材料や製品の搬出入などを支えた街道や海道、あるいは鉄道などの交通ネットワークと密接なつながりを持っている。近年は全国街道交流会議や北前船ネットワークのように、物産の集積地域や港を結ぶ広域ネットワークづくりが盛んである。山口県の萩往還では、萩と山口、防府の街道沿いの都市・首長が連携した海道観光を推進している。北前船ネットワークでは、かつての北前船寄港地の都市が、海道を通じて連携し、それぞれ

の地域の物産などを足掛かりとした観光交流を促進している。瀬戸内海沿いの各県では、かつてトーマスクックやシーボルトなどが絶賛した瀬戸内海の景観を活用し、訪日観光客の第2ディステーションの核として「エメラルトルート(海道)」をテーマとした広域連携活動も活発化している。

おわりに(蔵のあるまちの魅力をどう活かすか)

蔵のある町の魅力について触れてきたが、最後にまとめを兼ねて2点ふれておきたい。

一つは、「まちづかい」という視点である。これまでの「まちづくり」の用語には、都市再開発や駅前整備といったハード事業のイメージが強かった。時代とともに都市は変遷するので、時代時代の「まちづくり」は不可欠ではあるが、いま私たちに求められているのは、蔵や路地、掘割や旧街道などなど、地域が長い時間をかけて大切にしてきた資源を、今の私たちがしっかりと守り使い込んでいくという「まちづかい」の思想である。欧州では小さな田舎町にいくほど、自分たちのまちに誇りをもち、競い合うように町の美を磨いている。こうした田舎町にでかけて私たちが感動するのは、まさに町の人々の「まちづかい」への取組みや心ではないか。

2つめは、地域の蔵は食文化と密接なつながりを持っている。その繋がり意識的に再生し高度化することが、地域の付加価値を高める重要な手法である。食の宝庫といわれる北海道は、食文化の顔であるシェフやソムリエと生産農家や漁家などが結び、地域全体を食のクラスター(食クラ)によって高度化しようという試みを進めている。全国の酒蔵で、食材とシェフ、地域らしい食器、ハレの日の祭りや食の場づくりなど、いわば酒蔵を活用した「酒クラスター(酒蔵)」の事業化が図れないか。これまで分断されていた地域のさまざまな資源を酒や食文化、これらを象徴する蔵などの「場」で結び、高付加価値化によって地域の活性化を図る。この新たな試みに大いに期待したい。